

乳児期

感謝感情の発達に関わる最初の問いは、感謝の心は生まれながらに備わっているのかというものでしょう。アメリカ合衆国の心理学者、エモンズとシェルトン Emmons, & Shelton, (2002)は、生後間もない子どもが自発的に感謝を表すことはなく、また、多くの親が子どもたちに感謝の心や感謝の行動を教えようと努力しているという事実からすれば、感謝の心が生まれながらに備わっているとはいえないと主張しています (Emmons & Shelton, 2002)。

確かに、大人の社会におけるような意味で、感謝をしたり、感謝の気持ちをもったりするためには、様々な能力が必要です。感謝をするということは、単に快さや嬉しさを感じることは異なり、比較的高い知的判断をその内に含んでいます。例えば、自分が得た幸福は誰によるのか、そしてその人がどのような意図をもって自分に幸福をもたらしたのかを判断することが含まれています。これらを判断する能力が生まれながらに備わっているとは考え難いと思います。したがって、感謝の心が生まれながらに備わっているとは考え難いこととなります。

他方で、乳児をもつ多くの母親にとって、授乳の後にみせる乳児の表情は、「ありがとう」という言葉がなくても、感謝の気持ちを表しているとしかみえないかもしれません。しかし、乳児が、単に空腹をみたされた満足感を表わしているのか、それとも母親への感謝を表わしているのかを、その表情や動作だけから見極めることは難しいと思います。

感謝の心が生まれながらに備わっているのかという問題は、興味深い問いには違いありません。しかし、現在のところいえることは、感謝感情の基盤としての心理的な要素、例えば共感や愛着などは、早くから備わっていると考えられるものの、感謝感情には、高度な認知的要素が前提になっていて、人は誕生以降徐々にそれらを獲得していくということでしょうか。

初めに焦点を当てるのは、言葉による感謝の表現です。日本の子どもたちの多くは、感謝を表すための言葉を幼児期に獲得すると考えられます。実際、何かをもらった3—4歳の子どもに「ありがとうは?」と聞いて、親が子どもに感謝の言葉を促している姿はよく見受けられます。また、幼稚

園での挨拶などの教育の姿をみても、多くの場合、子どもはかなり年少のころから「ありがとう」という言葉を学ぶことがうかがえます。

それでは、この時期の子どもたちは、実際には感謝の言葉をどの程度学んでいるのでしょうか。幼児期の子どもたちの感謝の言葉についての研究がアメリカ合衆国でいくつか行われています。

感謝の言葉の使用について、5、6歳の子どもたちと10歳程度の子どもたちを比較した研究が行われています。5歳の子どもたちが親と一緒にいるときに、「こんにちは」、「ありがとう」、「さようなら」という言葉を話すかどうかを実験室のなかで観察した研究が行われています(Grief and Gleason, 1980)。その結果、86%の子どもは、親がきっかけや手がかりを与えたときは感謝の言葉を発しましたが、それがないときには、感謝の言葉を発した子どもは7%に過ぎませんでした。

同様の研究には、ハロウィンの夜の子どもたちの行動を観察した研究があります(Gleason & Weintraub, 1976)。ハロウィンには、子どもたちがグループで各家を回ってキャンディやお菓子をもらうという習慣が北米にみられます。ハロウィンの夜、大人からキャンディをもらったときの子どもたちの会話を分析したところ、10歳児では83%の子どもたちが感謝を述べていましたが、6歳以下の子どもたちで、感謝を述べたのは21%に過ぎませんでした。

これらの研究は、5、6歳程度の子どもたちの多くは、親などから手がかりやきっかけを与えられれば感謝の言葉を発しますが、自発的に感謝の言葉を述べるようになるのは、10歳程度であることを示唆しています。

ただし、以下の点を考慮する必要があります。一つは、状況による差異です。感謝をする場面が、頻繁に生じる場面である場合や、相手が親しみのある相手である場合は、より年少でも感謝の言葉を使うことば可能でしょう。また、第二は、文化差の存在です。例えば、インドにおいてはヒンズー語で感謝(dhanyavaad)を述べることは稀であり、もし述べるとしてもかなりあらたまった場面であり、また子ども同士で使うことはほとんどないといえます(Singh, 2015)

児童期から青年期前期における感謝のルールの習得

一般に、およそ10歳以前の時期に、家族との関係とともに、他の子どもたちとの関係が生まれてきます。そのような相互のやり取りのなかで、大人と同様の感謝の形が獲得されていきます。

私たちは、感謝に関するある程度共通の概念やルールをもち、子どもたちは、それらを成長とともに習得をしていくと考えられます。そこで問題になることは、感謝に関する共通の概念やルールとはどのようなものなのだろうかというものです。ここでは、感謝に関するそれらのルールを「感謝の文法(感謝図式)」と呼び、その内容を整理します。

感謝の感情や感謝の行為を特徴づける性質は何でしょうか。古くは、感謝のもつべき性質について、哲学者のイマヌエル・カント(Immanuel Kant)は、感謝には恩恵を与えてくれた者に対する尊敬という要素が含まれることを強調しました(Kant, 1797/1969)。また、社会学者のアダム・スミス(Adam Smith)は、感謝される者は、自分の自由な意志にもとづいて行われた望ましい行為によって、他者に恩恵を与えている必要があることをあげています(Smith, 1759/2003)。

また、21世紀になって、アメリカ合衆国の心理学者、E. マッカラ(McCullough, E.)らは、アダム・スミスを初めとする哲学者や心理学者の見解にもとづいて、感謝のもつべき性質をまとめています(McCullough et al. 2001)。

ここであらためて、「感謝の文法(感謝図式)」として、以下に手短かにまとめます(このHPの別のセクション「[感謝に至る過程](#)」にも掲載)。なお、これらの規則は、ある程度人々の間で共有されているとはいえ、世代、集団、文化による相違もまた考えられます。

「私はXさんに利益や幸福(Y)について感謝をしている」というときの、感謝の文法(規程集)。

- a. 私の利益や幸福(Y)の原因の少なくとも一部は、Xさんによるものであること。
- b. 私が受けた恩恵が大きいほど、Xさんに対して一層大きな感謝の感情をもつこと。ただし、動機論的な考えの場合は、結果よりもXさんの動機が考慮の対象になる。
- c. Xさんが費やした負担が大きいほど、私はXさんに対して一層大きな感謝の気持ちをもつこと。
- d. Xさんは、望ましい行為、少なくとも容認できる行為によって、私に恩恵を与えたこと。
- e. 私は、ポジティブな感情を結果としてもつこと。ここでいうポジティブな感情には、私が得た利益による喜び、Xさんとの絆が確認できたことや絆が強くなったことの喜び、Xさんに対する敬意・尊敬等がある。

これらの条件は、ゆるい感謝の規準かもしれません。少し厳しい「文法」には以下が含まれます。

f. Xさんは、私の利益や幸福を目的とした自発的な行いによって、私に恩恵を与えたこと。

eで述べられているように、感謝の感情の生じる状況では、同時に様々な感情を伴うことがあります。それらの感情として、恩恵を与えてくれた人に対する親しみ、尊敬、そして畏怖の感情などいわゆるポジティブな感情、そして、負債感、すまないという感情、自尊心への脅威などのネガティブな感情があります。どのような感情がどの程度伴うのかは、感謝の生じる状況や文化により異なる可能性があります。

感謝という行為や感情について、ある程度共有されているルールがあり、子どもや青年はこれらを習得することによって、大人の社会における社会的なやり取りに参加をします。感謝についてのこれらのルール、つまり感謝のルールが、どの程度の普遍性をもつのかは、今のところ明らかではありませんが、感謝感情の発達を考える際の仮説的な枠組みを提供します。

児童期における「感謝の文法(感謝図式)」の獲得—いくつかの研究

感謝の文法(感謝図式)の獲得や発達に関わる、いくつかの研究が行われています。ここでは、代表的な研究を紹介します。

初めに、前にあげた「d. 感謝される人は、相手の利益や幸福を目的とした行為により恩恵を与えていること」というルールについての研究を紹介します。

グラハム・サンドラ Graham Sandra (1988) は、5歳から11歳の子どもたちを対象にして、感謝感情を初めとする3つの感情(感謝感情、誇り、罪悪感)と動機との関係認識が、どのように発達するのかを検討しました。感謝感情に関しては、「相手を助けたいという自発的な動機のもとに行われた行為でなければ感謝の対象にはならない」というルールの獲得の年齢的な変化を調べました。

子どもたちは、感謝に関する以下2つのシナリオのうちの一つを読み、後に続く質問に対する回答が求められました。感謝のシナリオ(シナリオ1)は、学校のサッカーチームのキャプテンが、思いやりから転校生を選手に選ぶというものでした。それに対応する二つ目のシナリオ(シナリオ2)

は、サッカーチームのキャプテンが転校生を選手に選ぶが、理由は、校則のなかに新しい転校生をチームの選手にするという決まりがあるからというものでした。

実験に参加した子どもたちは、それぞれ一方のシナリオを読み、次に、いくつかの質問に回答しました——転校生が野球のボールを2つ手に入れたとします。そのとき、転校生はお礼としてその一つをキャプテンにプレゼントする可能性はどのくらいあると思いますか。また、転校生はどの程度、感謝を感じたでしょうか。

その結果、5-6歳児では、その後の転校生の行動や感謝の程度は、ほとんど2条件で差がありませんでしたが、10-11歳児では、統計的に意味のある差がみられました。すなわち、5-6歳児では、感謝やお礼の行為は、思いやりが原因となって恩恵を受けた場合と、校則が原因となっている場合とで区別されていませんが、その後、年齢とともに、「感謝される人は、相手の利益や幸福を目的とした行為により恩恵を与えていること」という感謝のルールが獲得されていくことが示唆されました。

その他、「恩恵を与えた人が、恩恵を与えるために費やしたコストが大きいほど、大きな感謝を受ける(d)」という感謝のルールに関連して、デック、P. (DeCooke, P.)は、小学校2年生、3年生、5年生各40名を対象にした研究を行っています(DeCooke, 1992)。この研究では、子どもたちに、ある人から援助を受けた場合を想定し、助けてくれた人が後に困っているときに助けてあげなかったときに感じる感情、お返しとして助けることの重要性などについて質問をしました。その際、助けてくれた相手の負担が大きい場合と小さい場合の話を用意し判断が異なるかどうかを調べました。

その結果、過去に助けてくれた相手の負担が大きいときと小さいときとで助けることの重要性が異なるのは、小学校5年生のグループでした。つまり、この時期になると大人の場合と同様に助けてくれた人の負担に応じて負債の感覚が異なるようになることを示唆しています。

感謝の発達に関する研究はわずかに行われているに過ぎず、仮説の域を脱することはできませんが、これらの研究は、感謝のルールが、主に児童期において習得されることを示唆しています。また、感謝のルールの各項目において必要とされる認知的機能、たとえば因果関係の認識や他者の行為の動機に関する認識は、児童期が終わるまでに獲得ないしは洗練されるという多くの研究結果をみると、感謝のルールが、児童期の終わるまでにかなりの程度習得されると考えてもよいでしょう。

感謝にもとづく反応の変化—応報の感謝から関係の感謝へ

これまで、「感謝の文法(感謝図式)」の獲得に焦点を当てました。一方、より広い観点から、願いを叶えてもらったときにどのような反応をするかを調べた一連の研究があります。なお、この場合、願いを叶えてもらったときに、感謝の感情が生じることが想定されています。

感謝から導かれる行動のあり方の年齢的な変化を扱った研究として、20世紀初めにスイスで行われたバウムガルテン—トラマーBaumgarten—Tramer(1938)による先駆的な研究があります。

この研究は、80年近く前のスイスにおける研究であり、現在の日本の子どもたちにそのまま当てはまるとはいえないかもしれませんが、感謝の発達についての示唆を含んでいます。その内容を以下に紹介します。

この研究では、スイスの7歳から15歳の子どもたち1059名を対象とし、自分をもつ望みを訪ねた後に、もしその望みを叶えてくれた人がいたらその人に何をするかを質問しています。そして、子どもや青年の回答から、以下の4つの感謝のタイプを見出しました。

・「言葉による感謝」 verbal

感謝を言葉で述べるという回答。7-14歳まで、30-40%でほぼ一定の比率を占め、年齢的な変化はみられませんでした。

・「具体的な感謝」 concrete

希望をかなえてくれたお返しに何かをあげるというような応報的な回答です。8歳で51%の子どもたちがこの種の回答をするが、12歳から14歳の子どもたちでは、この種の回答をするのは、6%に過ぎませんでした。なお、バウムガルテン—トラマーは、これらの回答は、(相手ではなく)自分にとって価値のあるものを、お返しとしてあげるという相手の観点を考慮しない傾向をもつとしています。

・「関係性の感謝」 combinational

恩恵を与えてくれた人との精神的な結びつきが高められたことを表わす。例えば、友情が深まったことを相手に伝えるという回答や、相手にとって必要なものを与えるという回答が含まれます。12歳の子どもたちの比率が最も高く、60%でした。

・「目的的な感謝」 finalistic

バウムガルテン—トラマーが最後にあげるのが、目的的な感謝と呼ばれる回答です。自分の望みをかなえてくれたときに、その望みの最終目標に向かって努力をするという回答です。例えば、パン作りの職人になりたいと希望している青年が、もしパン屋の職の機会を与えられたとしたら、立

派なパン職人になろうと努力するという回答があげられています。ただし、バウムガルテントラマーは、このタイプの感謝が各年齢でどの程度の比率でみられたかを述べていません。

バウムガルテントラマーの研究以降およそ 70 年たってブラジルで行われた 7 歳から 14 歳の子どもたち 430 名を対象とした研究でも、「言葉による感謝」がほぼすべての年齢で同様の比率で見られること、相手との関係の深まりを表現する「関係性の感謝」が年齢とともに増加すること、そして相手に対してお返しをするという「具体的感謝」が減少するという結果が得られています (Freitas, Pieta, & Tudge, 2011)。この結果は、さらにアメリカ合衆国の南東地域における 7 歳から 14 歳の子どもたちを対象とした研究でも確認されています (Tudge, Freitas, Mokrova, Wang, & O'Brien, 2015)。

まとめ

およそ 10 歳以前の時期は、一般に、家族との関係とともに、他の子どもたちとの関係が生まれてきます。そのような相互のやり取りのなかで、大人と同様の感謝のあり方が獲得されていきます。

この時期の感謝心の発達について、以下のように考えることができます。

児童期の初め、すなわち小学生の低学年の子どもたちの感謝感情や負債感、恩恵を与えてくれた人の意図や、費やした負担(コスト)が考慮されない傾向があります。この感謝感情のあり方は、「何かをしてもらったら感謝をする」という、紋切り型の感謝を想像させます。それはまた、恩恵を与えてくれた相手の観点に立って考えることが不十分であることにもよると考えられます。

児童期の後期、すなわち小学校の高学年になるにつれて、恩恵を与えてくれた人の意図のあり方が、その人に感謝をするかどうかの重要な決定因の一つになります。つまり、恩恵を与えた人が、規則や義務、あるいは他者からの命令によるのではなく、自分自身の意思によって恩恵を与えたときに、その人は感謝を受けるに値すると考えるようになります。また、恩恵を与えた人が費やした犠牲(コスト)に応じて、感謝の程度は異なるようになると思います。言い換えれば、感謝は、恩恵を与えた人の意図と費やしたコストに応じて分化されます。このような感謝のあり方は、高いコストを費やしてでも、自発的に恩恵を与えてくれる人との関係を深めるこ

とつながります。つまり、感謝が分化することによって、関係の強さもまたさらに分化をすることになります。

文献

- Baumgarten-Tramer, F. (1938). Gratefulness" in children and young people. *The Pedagogical Seminary and Journal of Genetic Psychology*, 53(1), 53–66.
- Emmons, R. A., & Shelton, C. M. (2002). Gratitude and the science of positive psychology. In C. R. Synder & S. J. Lopez (Eds.), *Handbook of positive psychology* (pp. 459-471). New York: Oxford University Press.
- Graham, S. (1988). Children's developing understanding of the motivational role of affect: An attributional analysis. *Cognitive Development*, 3(1), 71–88.
- Greif, E. B., & Gleason, J. B. (1980). Hi, thanks, and goodbye: More routine information. *Language in Society*, 9(02), 159–166.
- DeCooke, P.A. 1992. Children' s understanding as a feature of reciprocal help exchange between peer. *Developmental Psychology*, 28, 948–954.
- Freitas, L. B. D. L., Pieta, M. A. M., & Tudge, J. R. H. (2011). Beyond politeness: The expression of gratitude in children and adolescents. *Psicologia: Reflexão e Crítica*, 24(4), 757–764.
- Gleason, J. B., & Weintraub, S. (1976). The acquisition of routines in child language. *Language in Society*, 5(02), 129–136.
- カント、イマニュエル(1797/1969). 吉沢伝三郎・尾田幸雄訳、カント全集第11巻人倫の形而上学. 理想社(原著は、Die Metaphysik der Sitten, 1797年出版).
- Poelker, K. E., & Gibbons, J. L. (2018). The development of gratitude in Guatemalan children and adolescents. *Cross-Cultural Research*, 52(1), 4457. <https://doi.org/10.1177/1069397117736518>
- Singh, D. (2015). I've never thanked my parents for anything. *The Atlantic*, Jun

& <http://www.theatlantic.com/international/archive/2015/06/thank-you-cultureindia-america/395069/>

- スミス・アダム (1759/2003). 水田洋訳、道徳感情論. 岩波書店 (原著は Adam Smith, *The theory of moral sentiments first edition*, 1759 年出版).
- Tudge, J. R., Freitas, L. B., & O'Brien, L. T. (2016). The virtue of gratitude: A developmental and cultural approach. *Human Development*, *58*(4-5), 281- 300.